

3. 3助（自助・共助・公助）をつなぐのは、だれ、なに？

自助は個人あるいは家族が、共助は地域が協力して地域や個人を守る活動、公助は行政として救命、救助や復旧といった部分が役割としてあります。それぞれの持つ役割は当然ながらそれに精励するとしても、実はこの3つの役割を理解して、隙間なくチームを構成されていないと防災は成立しません。いわば一体感ができていないと、より機能的な活動になりませんし、無駄も多い、ミスが発生、コストもかかるということになってしまって、エネルギーの無駄が発生することになります。例えば、危険情報にしても行政から発信はされますが、受け手である地域や個人が適切に受けないと、サインの見落としや遅延が生じます。そして、情報から行動への移行がうまくいきませんし、そのための大きな負荷が発生する可能性もあり、真剣勝負なのです。いくら剛速球の投手がいても、野手がしっかりと守り、投げやすい環境や信頼が投手に伝わらなければ、一人芝居で相手に勝つことは難しいことになります。

あらゆるレベルでの災害対応ができていれば、総合的に俯瞰することもできるし、ヒト、モノ、金といった資源が無駄に浪費されることもないでしょう。そして、お互いに意思疎通ができれば、一層の防災力の向上につながります。防災は、日常の暮らし方と大きな違いはないわけで、我々は行動を起こすときには、常に、何のために、何をどうすればどうなるのかを見据えて行動しているわけで、その延長上に防災もあるということです。自助、共助、公助の連携が重要だということを述べましたが、それぞれをつないで流れをよくする役割が必要となります。多くの地域には防災リーダー的な人がいますので、その人たちの役割が大変に重要なものになります。

特に、地域のリーダーは防災行政に率先してアドバイスすることが期待され、それが公助を効率的に、機動性のあるものにするために不可欠なものになっています。2011年東日本大震災時でも、地域の人、モノ、情報、資源を把握しているキーマンがいるところは公助がスムーズに行われました。いわば、リーダーは地域の見守り人であり消防団員的なイメージだと思います。したがって、日ごろからリーダー同士或いは住民とのコミュニケーションは欠かせません。それには、住民の求めていることを把握して、上からの情報を伝達するだけでなく、住民とともに、地域の防災リスクに対する課題解決を考えていく共同作業に取り組んで情報を共有しておくことが大事です。

まずは、リーダーの一人一人が、何が求められ、何ができて、何をしたいのかを明確にすることが必要です。例えば、「地域の人に防災への意識、関心を持ってもらいたい」のか「リーダー研修としてレベルアップを図りたいのか」あるいは「住民が期待していること、求めていることを把握して、解決への支援をしたい」のかです。同時にリーダーの存在を知ってもらいながら、災害への認識を確認して、住民の期待することを把握する必要があります。リーダーの片思いでは、自己満足のみで地域防災力は得られません。災害時にうまくコミュニケーションや問題解決へリードできる環境を醸成しておくことこそが地域防災力のレベルアップに直結するものだと思います。